

東日本大震災における救護活動を振り返って

第6救護班 主事 菊田 基晴

～～～ いまでもあの時の光景を忘れる事は出来ません ～～～

あづま体育館避難所にて、福島第一原発の避難指示区域内にある病院の寝たきり患者 28 名を受け入れる救護活動を行った。大型バスで到着した際に見た光景は忘れることができない。避難所への搬送後診察で、3 名の方がすでに亡くなっていたことがわかった。4 名の方を福島赤十字病院に緊急搬送した。原発事故後で他県の救護班の協力が得られない中、日赤 DMAT 神奈川チームの協力が心強かった。「原発事故であっても協力するのが日赤として当たり前です。」との言葉が心に強く残っている。どんな状況であっても、日赤の使命を忘れてはならないと実感した。

いまでもあの時の光景は忘れる事は出来ません。

私は、福島原発事故後の3月16日に福島県営あづま総合運動公園体育館における救護活動に出動しました。あづま総合運動公園体育館は、当時、福島市最大の避難所で1000人以上の避難者が避難していました。事前の情報では、大型バスで比較的軽症の被災者が30名程度運ばれるので、その方々を重点的に診察とのことで出動しました。

現場に到着し、新たに入った情報では、運ばれて来る被災者は、原発事故があった福島第一原発より3kmの精神科病院から搬送され、ほとんどが認知症の寝たきりの患者で、中には既に亡くなっている方もいるとのことでした。又スクリーニングだけは終了していて、放射能には汚染されていないことだけは把握出来ました。本来はそのような方々は病院又は、施設に直接搬送されるべきと思われるのですが、どの様な経緯で、避難所に搬送されるようになったかは不明のまま、遺体安置所を含めた救護所の設置に取り掛かりました。

大型バス到着後、バスは体育館前に駐車することが出来ず、数百メートル離れた場所から、車でピストン輸送することになりました。搬送の為向かったバスの中が、冒頭の言葉になります。ほぼ満席で、通路にも寝かされている状態で、2日間オムツ替もされてなかったらしく、バスの中は酷い悪臭で、高齢者の方々が毛布にくるまれていました。3月14日に福島第一原発3号機原子炉建屋が水素爆発してから2日経っていたのですが、職員等が同乗していなかったため、2日間どのような状態だったか、又名前すら把握できない状況でした。

歩くことが出来る方は一人もいなかったため、バスから車に担架で乗せ替えを行ったのですが、折りしも雪が降りだし大変難渋しました。合計28名一人一人救護所へ搬送しましたが、医師の診察の結果、残念な事に3名の方が既に亡くなられていました。

胃瘻管理等が必要な方4名を、福島赤十字病院へ救急車搬送し活動を終了したのは、深夜日付を跨いでいました。

心強かったのは、原発事故後他県救護班の協力が得られない中、日赤DMAT神奈川県のチームの協力を得られた事です。上記の搬送も含め、それと平行して行われた救護所での活動や、本来救護所での管理が難しいと思われる上記の患者の管理の引継ぎをして頂きました。「原発事故であっても協力するのは日赤として当たり前です。」と言って頂いた日赤DMAT神奈川チームの主事さんの言葉は今も私の心に強く残っています。

今回の救護活動は、原発事故という特殊な状況下での、特殊なケースだったと思いますが、想定外で困難な状況のなかでも臨機応変の対応の大切さと、どの様な特殊なケースであっても日赤の使命を忘れてはならないと実感しました。